

## 「アナグリフによる地形の観察(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

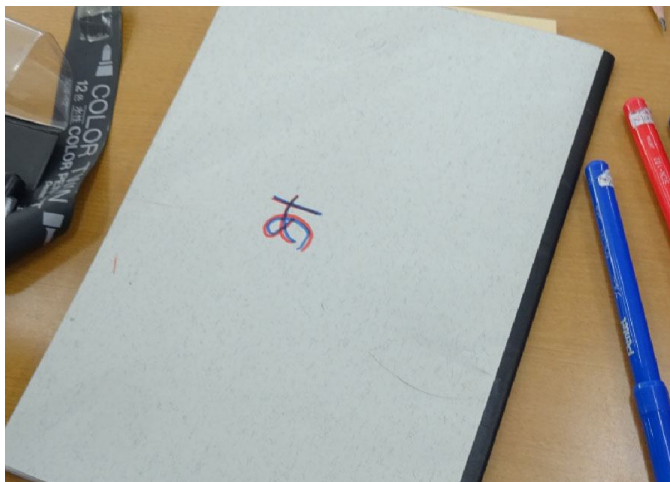
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

アナグリフによる立体視で注意すべき点の一つある。アナグリフは、もともと平面に印刷された図や写真を、無理に立体的に見る技術だ。つまり「脳(視覚)を騙している」状態と言える。長時間立体視を続けると、気分が悪くなることもある。中には短時間でめまいを感じる子どももいるので、使用中に気分が悪いと感じたら、休むように事前指導しておく必要がある。この傾向は年齢が低いほど顕著なので、低学年児童や幼児には使わせない方がよい。

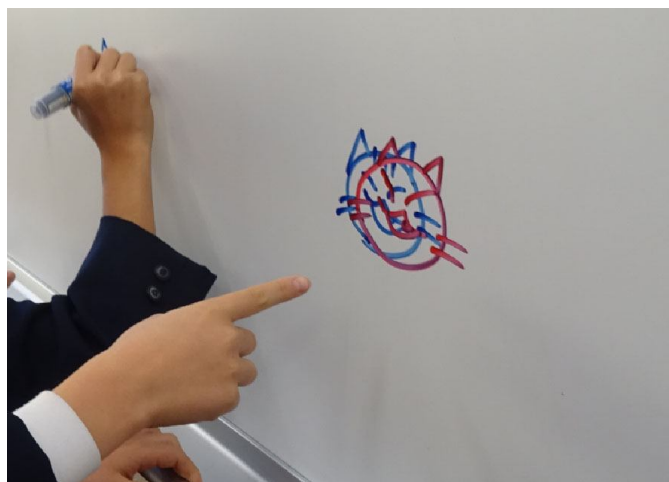


まずはメガネだけを配ってみた。当然、このようになる。もともとメガネをかけている子どもは、その上から着用する。普通の景色(たとえば教室内)を見ても、何となく変な色に見えるだけだ。しかし、片目ずつ見ると、風景が赤くなったり青くなったりする。



写真を配る前から「実験」が始まったのが面白い。この子どもは、ノートに赤と青で「あ」と欠き、それ

をメガネをかけて見ると、文字が浮かんで見えるのだ。



今度はホワイトボードに、「お絵かき」が始まった。これは「ニャーゴ(クラスの公式キャラクター)」が浮かんで見えるという「実験」同時に、右目を閉じて左目の「赤のセロファン」だけで見ると、赤の猫が消えて青の猫だけが見える。逆に左目を閉じて右目の「青のセロファン」だけで見ると、青の猫が消えて赤の猫だけが見えるのだ。これは面白い体験である。奇しくもこの遊びによって、右目と左目がちがう画像を見ている、という立体視の基本原則を理解できた子どもが多かったようだ。



安全指導が終わったあと、いよいよ最初の1枚の地形写真を配布した。「奥多摩湖と多摩湖」の画像だ。配布前に、この画像からどんなことを観察すべきなのかを、しっかり板書して理解させておくことが大切だ。それをしておかないと、単なる娯楽に終わってしまう。

### 【奥多摩湖と多摩川】

- ①奥多摩湖がどこにあるかを見つける。山の中の平らな場所が奥多摩湖の水面。
- ②浸食でつくられた「V字谷」を観察する。
- ③ダムの下流の多摩川の蛇行の様子を観察する。